

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.25-2 (通巻 72号) 2017.12.1 発行



西脇安吉の欧州留学中の日誌 1915 (大正4)年 (西脇家関係資料群)
P6 2017年度メディア資料研究会開催報告に関連記事

Contents

01	スポット ミュージアムの収蔵品 69	学生服 (上着)
02	巻頭つれづれ	宇治川のほとりに詩人・尹東柱の碑が建立されました
04	着任挨拶	戦争や平和をスポーツから考える
05	平和教育研究	RENKEI PAX SCHOOL2017 実施報告 Renkei Pax Workshop: 'Emancipating the Mind: History, Politics and Heritage', 17-26 August 2017, University of Liverpool, UK
06		2017年度メディア資料研究会開催報告
07		土曜講座「緊張高まる国際社会の行方を探る」
08	ミュージアムおすすめの一冊	『気候変動に適應する社会』
09	事業報告	

学生服（上着）

この資料は、1945年4月に広島県立第二中学校に入学した浜内茂樹さんの学生服です。当時は、義務教育（現在の小学校にあたる）を終えた後に中学や女学校へ進学するのは同学年のうち25%程度でした。県立の中学に合格した浜内さんは通学のため実家を離れて下宿をしていましたが、3月の「決戦非常措置要項ニ基ク学徒動員実施要綱」により1945年度は中学生も本土防衛と生産増強にあたることとなり、広島二中の生徒も、上級生は軍需工場、下級生は市内での作業などに動員されました。

浜内さんたち一年生は、建物強制疎開の後片付け作業に動員されており、8月6日も、本川の新大橋（現・西平和大橋）東詰に集合していました。ここは原爆の爆心から約500メートルの地点で、原爆が投下されるのを見た生徒もいました。爆発直後の閃光と熱線、爆風に襲われ、300人以上いた一年生の約三分の一は即死、残りの生徒もやけどと怪我を負い瀕死の状態になりました。浜内さんもひどいやけどを負いました。上着も肩や胸、背中などが焼けてなくなっています。右上腕の袖に縫い付けられた学徒隊章は白地部分は残っていますが、文字があった黒い部分は焼け落ちています。川に逃げ込んだり、家に向かおうとした生徒もいましたが、浜内さんは火が回ってきても次の日までその場に留まっていました。翌朝になり、舟で捜しに来た父親が同級生たちの遺体が転がる土手に浜内さんを見つけ、実家に連れて帰りました。

父親はこの時のことを後に次のように語りました。

「日ごろ、空襲でけがをしたら、学校か作業の場所で待っているように話しておりましたので、新大橋の所で見つけることができました。

たいへんなやけどをしていて、胸の名札と話しぶりで、やっとわが子とわかるひどいやられようでした。

舟に乗せ、つれて帰りましたが、みんなお母ちゃんといって死んだよ、夜はとても寒かった、水は川において飲んだが潮水はおいしいね、とっておりました。十日午前一時、死亡しました。」

広島二中の一年生が被爆した場所は、現在は平和記念公園の一部となり、1961年に広島県立広島第二中学校戦災死者遺族委員会によって碑が建てられました。1969年には、広島県動員学徒犠牲者の会により『動員学徒誌』が出版されました。同年には、広島テレビが遺族に調査を行って8月6日の一年生の様子をつたえる番組「碑」を制作しました。300名を越す生徒の中で、浜内さんのように生きて家族に会うことができたのは60数名、しかし、そうした場合も含めて全員が5日後には亡くなっていました。この番組は書籍化され、1984年にはアメリカでも放映され、2006年には映画としてリメイクされました。また、1999年には中国新聞の「遺影は語る」でも一年生



学生服（上着）52.5cm x 110cm

の最後の様子が特集されました。遺族によって広島平和記念資料館に寄贈された遺品も多く、遺族が語った中学生たちの被爆の状況が伝えられており、多くの来館者に戦争と核兵器がもたらしたもののやその中であつての人間について考えてもらう契機となっています。

浜内さんの上着は、学徒勤労動員中に犠牲となった中学生の資料として、戦没学徒慰霊記念施設「若人の広場」に寄贈され、その後、立命館大学国際平和ミュージアムに移管されました。被爆によりボロボロになったこうした衣服はその惨状を伝える資料であり、また、寄贈者にとっては大切な家族が最後に身につけていた遺品です。70年以上が経ち、当時のことを直接語るができる人がやがてはいなくなる中で、こうした資料を多くの人に見てもらうことの意義はますます大きくなっていきますが、慎重な取り扱いや保存が行われなければ、すぐにでも崩壊する資料でもあります。こうした資料を残すためには、資料の活用と保存に対する理解が進むことも求められています。

（学芸員 兼清順子）

参考文献

初等中等教育と高等教育との接続の改善について（中間報告）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309725.htm

ヒロシマの記録－遺影は語る 広島二中
<http://www.hiroshimapeacemedia.jp/abom/99abom/kiroku/2chu/4gakyu.html>

広島テレビ放送編、2015年新装第1版『いしぶみー広島二中一年生全滅の記録』ポプラ社

巻頭 つれづれ

宇治川のほとりに詩人・尹東柱の碑が建立されました

安齋育郎

(国際平和ミュージアム名誉館長)

地球規模で考え、地域から行動せよ

平和学でしばしば引用される言葉に、“Think Globally, Act Locally”という表現があります。「地球規模で考え、地域から行動しよう」という程の意味です。逆に、“Think Locally, Act Globally”という言い方もあります。こちらは、「地域から発想し、地球規模で行動しよう」ということになります。globalとlocalを一緒にしたglocalという新語も使われます。

2004年11月22日、国連は、毎年5月8日と9日を、「第二次世界大戦で命を失った人たちのための追悼と和解のための時間」(Time of Remembrance and Reconciliation for Those Who Lost Their Lives during the Second World War)とすることを決議しました(国際連合総会決議59/26)。1945年の5月8日から翌9日にかけて、ナチス・ドイツ軍が連合国に対する無条件降伏文書への調印や批准を行った歴史的事実をもとにしたもので、同決議は、国連加盟国や国連諸機関、NGO(非政府組織)、個人に対し、第二次世界大戦で犠牲になったすべての人々に敬意を払うよう促しています。

私が居住する京都府宇治市の市民の間にも、この地球規模での国連決議に触発され、地域から何か出来ないかと考えた人々がいました。折から宇治市では、第二次大戦中に日本に留学し、京都の同志社大学在学中に治安維持法違反容疑で逮捕・投獄され、27歳の若さで獄死した朝鮮の詩人・尹東柱(ユン・ドンジュ)を記念しようという市民運動が芽生え、成熟しつつありました。

詩人・尹東柱と宇治市とのゆかり

尹東柱は韓国では著名な詩人です。1917年12月30日に旧満州(中国東北部)でクリスチャンの家に生まれ、後にピョンヤンのキリスト教系のスンシル(崇実)中学校に通いましたが、折から日本の植民地支配下にもかかわらず、学校が「神社

参拝」を拒否したために廃校処分となりました。東柱は、1938年、延禧(ヨンヒ)専門学校に入学、従兄弟の宋夢奎(ソン・モンギユ)とともに寄宿舎生活に入りました。第2次世界大戦前夜です。

東柱は日本への留学を望みましたが、1940年の朝鮮総督府の制令によって「創氏改名」が施行されたため、日本への留学に際しては「平沼東柱」(ヒラヌマ・トウチュウ)と名乗りました。その年、東柱は手書きの朝鮮語の詩集『空と風と星と詩』を3部つくって、恩師と親友に贈りました。

2年後の1942年、平沼東柱は日本に渡って立教大学文学部英文科で学んだ後、同志社大学文化学科英文学専攻に移って京都の地で学ぶ身となりましたが、在学中の1943年初夏、クラスメートとともに現在私が住んでいる宇治の天ヶ瀬の吊り橋を訪れ、記念写真を撮ったり、友人たちに乞われてアリランを唄ったりして青春の一日を過ごしました。このときに撮影した写真が、現在のところ、尹東柱の人生最後の写真と考えられています。



1943年初夏、同志社大学の同期生たちと宇治川を訪れた尹東柱(前列左から2人目)。(学校法人同志社発行『尹東柱詩碑』より)

当時、戦局が敗色に向かう中、日本は権力の横暴が吹き荒れる時代に入っていました。尹東柱は、この写真を撮影して間もなく、京都の下宿先において「治安維持法違反容疑」で従兄弟の宋夢奎らとともに下賀茂警察署員に逮捕され、朝鮮独立についての友人との会話などが「民族運動の扇動」に当たるなどの理由で翌1944年2月22日に起訴されました。そして、同年3月31日に京都地方裁判所で懲役2年の判決を受けた後、福岡刑務所に収監中の1945年2月16日、弱冠27歳の若さで獄死しました。

私たち市民は、国連が5月8日・9日を「第二次世界大戦で命を失った人たちのための追悼と和解のための時間」と決議した2004年、尹東柱の詩碑をゆかりの地・天ヶ瀬に建立する運動に着手しました。以来、苦節13年にわたる諸方面との交渉を経て、2017年10月、ついに記念碑は建立の運びとなりました。碑は宇治川の天ヶ瀬ダムの南西側にある白虹橋（ハッコウバシ）のたもとにあり、すぐそばに宇治川の支流である志津川が注ぎ込んでいます。実は、碑の建立のための土地探しには多くの苦勞がありましたが、最終的には、志津川地区の人々がこの土地の使用を許可してくれました。私は、記念碑建立委員会の代表として、深く感謝しています。

碑は高さ約2メートルで、日韓両国を象徴する左右の板石（左は栄州石〈朝鮮半島産花崗岩〉、右は美島石〈日本産花崗岩〉）の間を、尹東柱を象徴する円柱（高興石〈朝鮮半島産花崗岩〉）が橋渡する美しい形にデザインされています。碑面には、尹東柱の詩「新しい道」が日本語とハングルで刻まれており、台座には「詩人尹東柱 記憶と和解の碑」と刻まれています。



宇治川の白虹橋（背景に写っている）のたもと近くに建立された「詩人尹東柱 記憶と和解の碑」

新しい道 一九三八・五・一〇

小川を渡って 森へ
峠を越えて 村へ
きのうもゆき きょうもゆく
わたしの道 新しい道
たんぼぼが咲き かささがが翔び
娘が通り 風が立ち
わたしの道は いつも新しい道
きょうも・・・あしたも・・・
小川を渡って 森へ
峠を越えて 村へ

（詩人尹東柱記念碑建立委員会 訳）

過去に現在を見、現在に過去を見る

この記念碑は詩人尹東柱一人を顕彰するために建立されたの

ではなく、宇治川ゆかりの尹東柱の生と死をよすがに、治安維持法下で自由に生きることが許されなかった東柱の無念に思いを馳せ、現在の私たちの生き方について考えるためにこそ建立されたものです。1993年12月、国際平和ミュージアムの初代館長だった加藤周一さんは、学徒出陣50周年を記念する講演会の中で、「過去に現在を見、現在に過去を見る」ことの大切さについて語りました。"Think Globally, Act Locally" "Think Locally, Act Globally" が空間的な「世界とここ」の関係で語られるのに対し、「過去に現在を見、現在に過去を見る」という加藤さんの言葉は時間的な「昔といま」の関係で語られています。ともに大切な視点でしょう。

尹東柱詩碑建立運動は、ブックレット『詩人尹東柱の想いつながり 記憶と和解の碑』を作成しましたが、その「あとがき」の中で私は次のように書きました。

私には「生きたいように生きられなかった過去」があります。1970～80年代、国の原発政策批判に熱心に取り組んだために「反国家的イデオログ」とみなされ、村八分・ネグレクト・嫌がらせ・差別・恫喝・監視・尾行・懐柔など、いろいろなハラスメントを受けました。言いたいことも自由に言えず、自分に正直に生きられないことは、悲しいことです。

1925年に始まった昭和の時代も、治安維持法による抑圧の時代として始まりました。1928年、京都選出の労農党代議士・山本宣治は治安維持法の改悪反対に奮闘しましたが、翌年、まさに同法改悪の強行採決の日に暗殺されました。京都府警特高課も、天皇の都であった京都の「治安維持」のために狂暴性を増していきました。

私は本書で「昭和俳句弾圧事件の碑」建立運動を紹介しました。『京大俳句』の西東三鬼は、1937年、「昇降機しづかに雷の夜を昇る」と詠んで治安維持法違反に問われました。俳人は「気象の異変と機械の静粛との関係を詠ひたかっただけ」でしたが、京都府警特高課は「国情不安をよそに革命思想が高揚する」と曲解しました。

尹東柱はそのような時代にここ京都で青春時代を過ごし、宇治川の天ヶ瀬に遺影を残し、やがて不本意にも治安維持法の犠牲となりました。私たちは、本書で紹介された尹東柱にまつわるさまざまな事実と誠実に向き合い、東柱の無念に思いを致し、感性を研ぎ澄まして時代のにおいを敏感に嗅ぎ分け、自由が抑圧されることのない「新しい道」を追い求めたいものです。尹東柱の詩碑が、過去と誠実に向き合う縁（よすが）となり、国をこえた相互理解の契機となることを望みます。

私は、この詩碑建立運動の成果を「平和のための博物館国際ネットワーク」(International Network of Museums for Peace)のニューズレター2017年9月号に紹介しました。地域と世界をつなぐ架け橋としてのニューズレターに相応しいと思ったからです。

着任挨拶

戦争や平和を スポーツから 考える



市井吉興

(国際平和ミュージアム副館長 / 産業社会学部教授)

このたび、副館長に着任した産業社会学部の市井です。よろしくお願いたします。

私の研究領域は、スポーツ研究です。いまや、スポーツは競技スポーツのみならず、ライフスタイル全般に浸透しています。それゆえに、社会福祉、メディア、ジェンダーなどの諸領域との学際的な研究を進めながらも、スポーツを豊かな生活を実現するための「手段」に留めることなく、スポーツに内在する文化的構想力を探究することを試んでいます。このような研究をしている私が平和ミュージアム副館長として、どのような関心を持って職務に携わっていきたくのかを、簡単ではございますが、ご紹介させていただきます。

やはり、「スポーツと戦争」、また「スポーツと平和」というテーマは、スポーツ研究をしている私にとって、私自身の研究テーマではないにせよ、無視することが出来ないものです。たとえば、「スポーツと戦争」というテーマであれば、総力戦体制の下、スポーツは国民の「戦意高揚」にとどまらず、「健民健兵」、つまり、銃後を支える健康な国民、最前線で戦う健康で屈強な兵士を創出する手段として、積極的に利用されてきました。また、「スポーツと平和」というテーマであれば、古代オリンピック競技祭期間中に機能していたエケケイリアから着想を得た、国際オリンピック委員会（以下「IOC」と称します）の「オリンピック休戦」があります。IOCは、1992年の第99回IOC総会で『オリンピック休戦』を支持するIOCの「アピール」を決議しました。この決議以降、IOCは国連との関係を強化しながらオリンピック休戦の具現化へ向けた活動を進めています。

このような「スポーツと戦争」、「スポーツと平和」というテーマに関連して、私が関心を持っているのが、パラリンピックの「現実」です。たしかに、2016リオ・パラリンピックでは、日本選手団の輝かしい活躍がありました。しかし、その一方で、リオ・パラリンピックは、戦争や内紛で傷ついた多くの負傷兵・元兵士の参加国がこれまでになく、多くあったという

「現実」がありました。皆さんもすでにご覧になられたかもしれませんが、この点に焦点を当てて、2016年9月12日にNHK総合放送の「クローズアップ現代+」で放送された『『戦場の悪夢』と金メダル：兵士とパラリンピック』は、この問題を考えるポイントが満載でした。

番組では、まず、リオ・パラリンピックには、負傷兵・元兵士の参加国が17カ国（イギリス、アイルランド、オランダ、ドイツ、イタリア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、セルビア、トルコ、イスラエル、イラク、イラン、ルワンダ、アンゴラ、カナダ、コロンビア、オーストラリア、アメリカ合衆国）にも及んだことが紹介されました。これらの国々は、紛争を抱える国であり、また、テロとの戦いに参加している国となっています。つぎに、アメリカ合衆国では、パラリンピックに出場した選手10人に1人は兵士または元兵士であること、原隊復帰も兼ねて負傷兵のスポーツ支援が充実していること、さらに、国内のスポーツ大会で好成績を収めた負傷兵には、収入や練習に専念する環境を保障し、専属のコーチを配置し、パラリンピックへの挑戦を促していることなどが紹介されました。

番組内では、視聴者から寄せられたコメントが紹介されますが、多くのコメントが上記のような事態に驚きを隠せませんでした。また、私自身も、アメリカ合衆国の国家を挙げてスポーツを用いた負傷兵の支援には、非常に驚きました。それゆえに、私は番組の中でキャスターからゲストコメンテーターに向けた以下の質問にどのように答えるのかが、非常に重要だと思われまます。

軍の担当者がパラリンピックプログラムは回復した兵士の姿を見せて、ほかの負傷兵を奮い立たせる仕組みだと言っていたが、スポーツ、パラリンピックが、再び戦場に戻るサイクルの一部に位置づけられていることをどう思うか。

現時点で、パラリンピックに臨む日本のパラリンピアンは、先天的な障害や、もしくは事故などで障害を負った方々で編成されています。しかし、日本を取り巻く情勢の変化の中で、2020東京パラリンピックに臨むパラリンピアン編成に、変化はありうのでしょうか。だからこそ、私たちは先のキャスターの問いかけに対する回答をスポーツのみならず、日本を取り巻く情勢の変化の中で模索しなければならないと思います。

今後、国際平和ミュージアムが、「スポーツと戦争」、「スポーツと平和」というテーマを考え、深めていく一助となるよう職務を全うさせていただきます。

Renkei Pax Workshop: 'Emancipating the Mind: History, Politics and Heritage', 17-26 August 2017, University of Liverpool, UK

FRENCH Thomas, Associate Professor of College of International Relations, Ritsumeikan University

This August the second stage of the Renkei Pax School workshop was held at the University of Liverpool, in association with International Slavery Museum. The workshop formed the UK leg of the set of two workshops, the first of which was hosted at Ritsumeikan's Peace Museum last year. As in the previous workshop the participants consisted of graduate students from the six UK and six Japanese universities which form the Renkei group. Faculty from both Ritsumeikan and Liverpool also hosted lectures during the workshop.

On August 17th students visited the International Slavery Museum and the Quaker Meeting House and had a lecture from Professor Ana Lucia Araujo (Howard University) on the topic of "Memory, History, and Heritage of Slavery: Lessons of an Unfinished Past". The following day Professor Araujo also talked about the representation of slavery in museums and public spaces, alongside two museum curators, Françoise McClafferty and Jean-François Manicom. A further lecture was given that day by Dr. Alex Balch (the host of the workshop) and Professor Gary Craig (Newcastle University) on "Anti-slavery, heritage and development".

The following day field trips to the Imperial War Museum in Manchester and the city of Lancaster were conducted and the students attended additional lectures. The next few days saw students attend multiple workshops and lectures by guest speakers on 'dark tourism', racism, memory, and the historical and contemporary slave trade. On August 23rd the students also attended Slavery Remembrance Day in Liverpool, participating in various events and visiting a special exhibition in the Slavery Museum.



Slavery Remembrance Day in Liverpool

The final few days of the workshop saw the students begin to share ideas about research outputs and future projects as well as attending various further workshops and events. On Thursday 24th August a session was led by Dr. Thomas French and Dr. Sumiyo Nishizaki (Ritsumeikan University) which focused on the Japanese Empire's rise and fall and its legacies in the modern world. The session also included a presentation by Dr. Cheryl Hudson (University of Liverpool) on US-Japanese relations and the 1924 Immigration Act.

The final full day of the program included further workshops and a keynote speech by the multi-award winning writer and film director Amma Asante. The workshop closed with a final field trip to the Museum of London Docklands and a farewell dinner. As the Renkei program evolves in the future this workshop will serve as a good example of successful UK-Japan research partnership on peace related issues at the graduate level.

昨年9月に立命館大学国際平和ミュージアムで実施したRENKEI PAX Schoolの続編であるPAXワークショップ「心の開放：歴史・政治・遺産」が、8月17日～26日の10日間リバプール大学や国際奴隷制博物館等を舞台に開催されました。日英のRENKEI加盟校から大学院生が参加し、研究分野の垣根を越えた多様で学際的なセッションを通じて、メモリーションや記憶の継承、歴史的トラウマ、政策立案、社会の融合、そして平和構築などのつながりを探りました。

2017 年度メディア資料 研究会開催報告

兼清 順子

(平和教育研究センター運営委員 / 学芸員)

平和教育研究センターが開設された昨年より資料と向き合った研究の場をつくり、多様な分野からの資料研究を集積して平和資料研究の新たな可能性を開くことを目指すメディア資料研究会が始まりました。2016 年度には 4 回の研究会が開催され、3 月には報告資料をまとめた「資料研究」も発行されています。

博物館という場で展開されるこの研究会の特徴は、館蔵の多種多様な資料を目の前にして閲覧しつつ、その資料を用いた研究をすすめる専門家の報告を聞き、資料の検討を深めることです。

2017 年度も昨年同様に 4 回の研究会を開催予定です。

6 月 23 日（金）には、2017 年度初回となる第 5 回メディア資料研究会が開催され、番匠健一氏（立命館大学生存学研究センター客員研究員）による「西脇家資料—家族史・女性史として」と題した報告が行われました。

当館収蔵の「西脇家資料」は、ビキニ事件で被曝した「第五福竜丸」を調査し、放射線を浴びていたことを明らかにした西脇安（大きなガイガーカウンターで第五福竜丸の放射線を測定する様子を映した写真はひろく知られています）の両親である西脇安吉と西脇りかに関わる資料です。

ドイツで醸造学を学び、日本でこの分野の草分けとなった西脇安吉と、教育者として常磐会の中心人物となった西脇りかは、当時としては珍しい恋愛結婚、そして夫妻ともにキャリアを持つ恵まれた階層でした。報告の中では、自宅前での家族写真など、この時期の家族史に関わる資料としての側面が取り上げられました。また、報告の中では西脇安の晩年の妻であった



西脇家資料



第 5 回研究会の様子

榮さんが、安の生涯をはじめ、面識のなかった安吉やりかについて、常に生き生きと語り継ぎ、資料を残そうと尽力されていた姿は、従来とは異なる家族史の語り方や残し方の可能性を感じさせるものであったことも言及されました。（残念ながら西脇榮さんは昨年お亡くなりになっています。ご冥福をお祈りいたします。）

西脇安吉は、明治 34 年に大阪高等工業学校応用化学科を卒業し、その後ドイツに留学してヨーロッパの醸造化学を学び、現在の大阪大学の醸造科の教授となり、醸造学会の会長などもつとめました。この分野は後に生物工学として発展した分野です。安吉に関する資料には、ヨーロッパ留学中の第一次世界大戦期の日記なども含まれており、日本の化学工業や生物工学に関する資料であるとともに、当時の日本の知識人のヨーロッパ情勢に対する視点を伝える資料でもあります。

西脇りかは、東京女子高等師範学校（現在の御茶ノ水女子大学）を卒業し、大阪女子師範学校の教員などをつとめ、女子教育に尽力する中で、関西の女子教育や婦人運動に関わっていき、常磐会短期大学の初代学長にもなりました。キリスト教徒でもあったことから、戦後は GHQ の指示で教育委員も務めていました。

今回の報告によって、国際平和ミュージアム収蔵の「西脇家資料」が、ドイツ醸造学と大日本帝國の関係、大正期の関西における婦人文化運動と女子教育、さらに戦後の教育のつながりなどを浮かび上がらせる資料としての研究が期待できることが明らかになりました。

今後も引き続き、第 6 回「人びとと原子力—立教大学共生社会研究センター所蔵資料から—」（立教大学・平野泉氏）、第 7 回「民間人空襲被災者の補償問題の戦後史～福島啓氏氏旧蔵の名古屋空襲訴訟の裁判資料から～」（東洋大学・植野真澄氏）が予定されており、年度内に第 5 回から第 8 回までの研究会を開催し、「資料研究」を発行の予定です。

2017年8月土曜講座

緊張高まる国際社会の行方を探る

8月5日の講師は、「戦争と社会正義—昨今の軍事的緊張・難民・人権問題に法はどのように対応するのか？経済社会協力による平和達成への道のり」について、吾郷眞一法学部教授が担当されました。何が根源的に戦争に至らしめ、それを取り除くためにどのように人と国際社会は行動し、法を通じて平和実現をめざしているのか。講師の専門である国際法の視点から、「戦争と平和」、「経済社会協力による平和の達成」、「国際人権保障の枠組み」の3つの柱立てに沿って、国際労働機関での経験や旧西ドイツで過ごした体験も交えながら、平和実現に向けた展望について解説されました。経済社会統合が政治的経済的統合をもたらすという議論、すなわち単純な機能主義議論は昨今のトランプ現象や英国のEU離脱を見るまでもなく、そのままでは簡単に平和な国際社会の実現は進みません。しかし、国連が呼びかけているSDGs（持続可能な開発目標）のような目標が達成されたならば、戦争の危険は格段に少なくなるはず。SDGsの特徴は、その目標達成のために、従来のような主権国家だけでなく、企業や市民社会が関与する仕組みになっていることにあります。平和な世界をつくるためには、政府や軍隊だけに頼ることなく、市民社会が一丸となって、総合的な平和達成に向けて努力し続けることではないでしょうかと締め括られました。聴講者は207名でした。



講演する吾郷先生

26日は「マンガと平和を展示する」と題して、田中聡当館副館長と吉村和真京都精華大学国際マンガ研究センター教授の講演と対談でした。マンガはフィクションである一方で、博物館は史実に基づいて展示することから、田中先生は、「戦争を



対談する吉村先生（左）、田中先生（右）

取り上げたマンガ」は平和博物館で取り上げることが難しい素材であると課題提起され、人間や社会の本質を問う作品が登場し増え続けているマンガの現状を見る時、平和博物館は果たして戦争マンガを展示できるのか。展示するとすればどの様に展示すべきか。当館の理念と方針を交えながら、1930年代からの代表的作品を提示し、マンガ作品を様々なアプローチや展示技法を用いることで、歴史資料にははっきり書かれていない「事実」を読み取ることもでき、読む人それぞれが事件について多様な解釈を生み出すきっかけにもなり得ると積極面を解説。吉村先生は、マンガ博物館のアプローチとして2015年に「マンガと戦争展」を開催したことを紹介。原爆・特攻・沖縄・満州・戦中派の声・マンガの役割という6つテーマを4象限で立体的に分類して作品を展示し、東京とアメリカでの巡回展で、それぞれの環境に応じて展示方法をどう換えたか、またそこでの予想外の反響や受け取り方のズレなどから難しさを感じたことなどを率直に説明されました。

対談では、戦後累計1,000作に及ぶ戦記・戦争マンガの広がり概観しながら、戦争と平和展示を考える際にぶつかる課題について、「マンガ」と「ミュージアムでのマンガ展示」の双方向的な作用や効果から解決を探りました。マンガミュージアムと平和ミュージアムの立場や違いも踏まえながら、マンガと平和を「架橋する展示」の課題について考察され、両館は運営主体が大学で、京都にある国際性を共通にする側面から相互協力の可能性も開けるとの展望も提示されました。展示を通して得られる新たなミュージアムの視点形成に関して示唆に富むものとなりました。144名の聴講者でした。

『気候変動に適応する社会』

田中 充・白井信雄 編

地域適応研究会 著

技報堂出版 2013年



2020年以降の地球温暖化対策の国際的枠組みを定めた「パリ協定」が2016年の11月に発効しました。これは、2005年の「京都議定書」に続く温暖化対策の国際合意であり、先進国だけでなく中国やインドなどの開発途上国が温室効果ガスの排出抑制に取り組むという初めての枠組みです。パリ協定については米国のトランプ大統領が離脱を宣言したことから大きなニュースになりました。また、ストックホルム・レジリエンス・センター所長のロックストローム教授による、プラネタリー・バウンダリー（地球の境界線）の主要な9つのシステムのうち、「生物多様性」と「気候変動」についてはすでに限界を逸脱しているというショッキングな報告があります。本書は、科学的な知見と筆者らが直接関与した取り組みを含めた多くの政策事例等を紹介して、気候変動に対して地域社会がどのように適応していくべきかを論じています。

気候変動の影響には、「気候外力（気温や降水、豪雨などの極端現象）」「感受性（人間側の影響の受けやすさ）」「適応能力（人間側の影響を抑える力）」の3つの要因が関係します。気候外力が人間に働きかけ、人間側の感受性が高い場合に影響が顕在化しますが、適応能力はそれを抑制する方向に働きます。気候外力と感受性、適応能力によって規定される気候変動の影響の受けやすさの程度を「脆弱性」と定義しています。

気候変動への対応には、温室効果ガス排出を削減するなど温暖化の原因物質を減少させる「緩和（策）」と、一定の温暖化の進行を前提として、人間活動の仕組みや社会システムを調節し、その影響を回避・軽減する「適応（策）」があります。緩和策と適応策は気候変動対策の両輪であり、お互いに補完し合うことによりそのリスクの低減を目指すものですが、本書ではタイトルの「適応」の文字が赤字になっていることから分かるように、評者自身これまで正しく理解できていなかった適応策を中心にまとめられています。

現在の「適応策」の傾向をまとめると、1) 豪雨による災害への対策や熱中症対策などの気候変動に対する適応策として意識されないで実施されているものが多いこと、2) 水害予防としての堤防のかさ上げや増えすぎた亜熱帯性動植物の駆除などの対症療法的な単体技術対応が中心になっていること、3) 対象が幅広い行政分野にわたり、また中・長期的な取り組みが必要であるにもかかわらず、大きな戦略や方針に欠けること、などがあげられています。それに対して、地域の脆弱性や感受性を改善することや、「回復」から「予防」にシフトした対応策

の策定などが今後求められます。

地域に残る伝統や文化は、旧世代から受け継いだものを守って将来世代に継承していくことで成り立っています。そうした文化が環境の劇的な変化に曝されることにより、その継承や継承が困難になる場面が増えてきています。例えば「諏訪湖の御神渡り」は、冬に全面結氷した湖面が昼夜の温度差により数kmにわたってせり上がる現象で、これを「神が湖を渡った足跡だ」として神事が執り行われます。しかし、最近では温暖化により湖が凍らない年が増えてきているそうです。広島県の「厳島神社」は海を敷地とした歴史的建造物ですが、海面上昇により冠水する事態が近年度々生じています。また、秋田県の「横手のかまくら」を守り続ける取り組みや天然寒天の生産の減少など、地域文化が直面する気候変動の影響が紹介されています。気候変動がこのまま進行すれば、こうした地域の文化が損なわれることになりかねません。こうした影響に対して、科学的な機構や原因の解明は必要ですが、地域の文化行事を見つめ続け、記録に残すこと等の地道な活動の重要性が指摘されています。

世界の多様な生物の分布が10年で平均6.1km北上したという報告があるそうです。人類の生存基盤である生態系への気候温暖化の影響は、それによる変化の速度が比較的ゆっくりであるため、将来予測を含めて様々な観点から考察する必要があります。本書では、日本における代表的な自然林優占種であるブナについて筆者らの研究が紹介されています。人為の影響をほとんど受けていない世界最大級の原生的なブナ林の価値により「世界遺産」に登録されている白神山地をはじめ、ブナは北海道から九州まで広く分布していますが、分布予測モデルによれば2100年頃にはその潜在生育域は約40%に縮小してしまうそうです。温暖化に対するブナの保全については、この予測に基づき地域毎に異なる手法が求められます。

日本では高齢化と人口減少が進み、地域活動の縮小が進んでいく一方で、資源やエネルギーの制約が顕著になることが、進行する地球温暖化への対応を困難にしています。本書は長期的な気候変動やその影響を見据えて、私たちが生活や産業、まちづくりに関係する諸問題に取り組んでいくためのヒントを与えてくれます。

鈴木健二

（国際平和ミュージアム運営委員 / 薬学部教授）

世界報道写真展 2017

—WORLD PRESS PHOTO 17—

滋賀会場（立命館大学びわこ・くさつキャンパス）

会 期：2017年9月21日（木）～10月1日（日）

会 場：エポック立命 21 エポックホール

参観者：991名

京都会場（立命館大学衣笠キャンパス）

会 期：2017年10月3日（火）～10月27日（金）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム中野記念ホール

参観者：8,776名

大分会場（立命館アジア太平洋大学）

会 期：2017年10月30日（月）～11月12日（日）

会 場：A棟コンベンションホール

参観者：2,021名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社
世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会
公益社団法人日本写真家協会、全日本写真連盟、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS 京都、滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会、NHK 大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社

協 賛：キヤノンマーケティングジャパン株式会社
Getty Images ジャパン株式会社



キャンパス内に取り付けられたフラッグ

今年で60回目を迎えた「世界報道写真展」。今回は世界各地の125の国と地域から8万点を越える応募がありました。会場には、トルコの首都アンカラで開かれた写真展の開会式で非番の警察官が駐トルコ・ロシア大使を射殺した事件を捉えた大賞作品（ブルハン・オズビリジ/トルコ）のほか、イスラム国（IS）の恐怖と食糧難によって郷里を追われた子どもの姿や、放置された漁具により生命を脅かされるウミガメの姿を捉えた作品など、8部門45人の受賞作品が並びました。毎年来場いただくリピーターの方をはじめ、一般の方や学生など今回初めて来場いただいた方も多く、幅広い層の方々から大きな反響がありました。来場者には、一枚一枚に向き合うことで世界でいま何が起きているのかを受け止め、「平和」について考えていただく機会となりました。

今回新たな試みとして、立看板と連動したデザインのフラッグをキャンパス内に取り付けたことで実際に目に留められた方が多かった上に、SNSなどを通して広く知っていただくことができました。学内の他部課との連携や、びわこ・くさつキャンパスで同時期に開催されたサスティナブル・ウィークイベントとのタイアップ、またミュージアム運営委員および各先生方からの学生への広報協力など、学内外の多くの協力を得たことで来館者増につなげることができました。

来館者 アンケートより

テレビでは見れないような写真があった。今おこっていることをより深く理解できたと思う。
(10代 高校生 大津市)

初めて見たもの、聞いたことがあるもの、すべて見て感じて、私なりに考えなければいけないと思いました。思ったことはたくさんあります。それを今後もっと深く知り、学び、社会で生きていく人間として私には何ができるかを探し、行動に移したいと思いました。
(10代 高校生 京都市)

報道記者を目指しており、自らの写真・記事が平和のためになるよう努力したい。その想いを後押ししてくれる展示だった。
(20代 学生 京都市)

毎年色々深く考えさせられます。日本はなんて平和なんだと安心してしまう自分はどうなのかも思います。もう少し子どもが大きくなったらつれて来ようと思っています。
(30代 主婦 滋賀県)

毎年、世界報道写真展に来ていますが、世界のリアルな現実が、切り取られた瞬間の画像とは言え、今を生きる私たちに訴えかけるものがあります。自由な報道の持つ意味と重要性を改めて感じました。
(50代 教育関係者 滋賀県)

世界にある矛盾について、あらためて痛感した。人間社会の連帯のむずかしさを感じた。何とかならないものだろうか。
(70代 大阪府)

事業報告 | 特別展

報道写真を撮る裏側には必ず写真記者の姿がある。その姿が思い浮かんだ。喜怒哀楽の感情がありながらも使命感の感じられる作品が多く、感動した。

(20代 学生 京都市)

世界の危険とされる国々へ出向くジャーナリストの人たちを時には批判してしまうことがあります。しかし、今回目にした数々の写真を通じて、知ることはたくさんあり「心を痛める」事に気づきます。「伝えたい」という気持ちが伝わりました。多くのジャーナリストに敬意を表します。(50代 会社員 大阪府)

今日会場に小学生が何人か先生と来ていましたがとても良いことだと思います。もっともっと日本の子ども達に今の世界を知らせるべきです。良い機会をありがとう。現実の世界とは信じられないです。テレビで世界のニュースを毎日のように見ているけど、自分自身あまりの平和ボケに恥ずかしくなります。

(70代以上 主婦 京都市)

自然から、現代社会、そしてスポーツまで、様々な分野の写真を見て良かった。普段あまりこういうものを見ないので見られてよかった。またこういう展示を見に来たいです。

(10代 高校生 大阪府)

平和を、すべての子ども達に笑顔をと、思わずにはいられません。多くの人たちに見て欲しいです。

(40代 主婦 京都市)

頭の中に沢山の情報が入ってきて、整理が追いつかなくて、ぐわんぐわんした。自分がこれまでいかにぬくぬく育ってきたかわかった。環境に感謝しなくてはならない。そして、この世界で起きていることから目を背けてはいけない。私には何ができるのか考えようと思う。また、知らないことだらけの世界を、少しでも多く知る為に今後もこのような機会を大切にしていこうと思う。(10代 学生 京都市)

日常生活では忘れてしまっている全世界の人々のこと、たまたま日本の国に生まれ、生活していること。そのことにいつも気付かされる。どの地に生命を頂き生かされる人々も同等の人間である。私たちが他の地で過酷な状況で生きている人々と、ともにありたい。

(60代 主婦 京都市)



京都会場

大学で写真部に所属しているのですが、先輩から本展に行ったと聞き訪れました。危険と隣り合わせ、いつ自分が命を失ってもおかしくない状況でも、事実を伝えるために写真を撮る方たちが想像できました。普段目にする事のない世界の報道写真を見て、いかに自分が暮らす環境が平和なものなのかということに改めて、思い知りました。また来年訪れたいと思います。(20代 学生 京都市)

涙が出てくるということが、この特別展において正しい感情なのかはわかりません。しかし、自然と涙がでてきました。自分の知らないところで食べ物や暮らすところがなく死んでいってしまう人がいる、頭でわかっていても実際に目にしないと本当の意味で理解できないということを痛感しました。

(20代 学生 京都市)



フラッグと連動したデザインの立看板

改めて平和について考えさせられました。なぜ戦争や紛争がなくなるのか、この先もまだまだ続くのかもかもしれない考えると心が苦しくて仕方ないです。ぜひたくさんの方にこの事実を知ってもらい少しでも力になれるよう世界全体で考える課題となればと思います。(20代 会社員 兵庫県)

カメラを通して写し出された画像を見て、ただ人々は平和に普通に暮らしていけないのだろうか？争うことで何も生まれて来ない。毎年見て事実を知ることは大事です。いつの日か世界中からこのような写真ではなく笑顔の写真が展示されることを望みます。(60代 京都市)



滋賀会場

フォトジャーナリスト川畑嘉文講演会

「なぜフォトジャーナリストは現場に向かうのか：
南スーダン難民は今」

日 時：2017年10月5日（木）18：00～19：30

場 所：立命館大学

平井嘉一郎記念図書館 1F カンファレンスルーム

講 師：川畑嘉文（フォトジャーナリスト）

対談者：岩田拓夫（立命館大学国際関係学部准教授）

参加者：54名

オープニング企画として、難民キャンプや戦争・災害被災地を訪れ、故郷を追われた人々の取材を続けるフォトジャーナリスト川畑嘉文氏を招き、講演会を開催しました。

一文学青年で、写真に全く興味を持っていなかった川畑氏がなぜ紛争地へ出向き、現場を撮り続けるのか。川畑氏はまず若い頃の体験や葛藤、転機を迎えた9.11の取材、そしてフォトジャーナリストとして独立するに至った経緯を詳細に語られました。

また最近の活動として、主に南スーダンの現状について政治情勢にも触れながら、キャンプへ移動する人々や学校での子どもたちの様子、兵士から暴行を受けた少女、コミュニティーの一角にできた埋葬地等々、写真を一枚一枚紹介しながら報告されました。現場ではフォトジャーナリストが一番無力であることを痛感するといいます。生活が困窮している中で自分のために食事を準備し迎え入れてくれる人々、無法地帯での取材に命がけで協力してくれる人々に自分はいったい何が出来るのか。川畑氏にとって、それは現場を取材し多くの人に伝えることであるといいます。もしかしたらそれによって誰かが何か行動を起こしてくれるかもしれない、そのために自分は現場へ行って



対談する川畑氏（左）と岩田先生（右）

いる。不条理で不公平な世の中だけれど、なんとか平等な社会をつくりたい。一人ひとりにできることはとても小さなことだけれど、そんなことから社会は変わっていくのではないか。そんな思いでフォトジャーナリストを続けていると語られました。なぜ現場に向かうのかという問いとともに、参加者一人ひとりもまた自分に何が出来るのかを考える時間となりました。

講演後には、本学国際関係学部の岩田拓夫准教授との対談がありました。会場からは「どんなときにシャッターを切るのか」「現地の人に受け入れてもらうために心がけていることはあるか」「SNSでの情報発信についてどう考えるか」等々多くの質問が出され、「心に響くお話や魂を震わせる写真の連続でした」「ジャーナリストの仕事の大切さはいつの時代も変わらないと思う。これからも私たちに情報を届けてほしい」といった感想が聞かれました。終了後も多くの学生が会場に残り、川畑氏と語られました。

「竹中真ジャズピアノコンサート—変えられた運命」

日 時：2017年10月14日（土）14：00～15：30

場 所：立命館大学国際平和ミュージアム 1F ロビー

参加者：111名

会期半ばにピアニスト竹中真氏を迎え、ジャズピアノコンサートを開催しました。

米国コネチカット州に生まれ京都に育った竹中氏は、ベトナム戦争中（当時17歳）に兵役を拒否したことで、戦後、正規の学生ビザで米国留学中に国外退去を命じられ、裁判を経た1986年、法令*により永住権が認められました。

コンサートでは「シェルブールの雨傘」「ひまわり」「禁じられた遊び」など、戦争映画のテーマ曲に始まり、アイルランドやロシアの民謡、日本の童謡や沖縄音楽など、戦争に関わる全12曲を作品紹介とともに演奏していただきました。またご自身の過去の体験や平和への想いについて、当時を振り返りながら語られた後、最後に自身のテーマ曲であるという「青い目の人形」を演奏されました。

会場は一般の方や学生などで満席となり、「心に響く演奏でした」「どの演奏曲も戦争の悲劇を背景に演奏もトークも展開され、心を揺さぶられた」「ここにきて良かったと素直に思えたすごいコンサートでした」といった感想をいただきました。

* Immigration Reform and Control Act：米国滞在5年以上の不法移民の永住権を認めた法令。



ミニ企画展示

第109回

ミュージアム 25 周年記念 「特別展ポスターコレクション 1992 - 2017」

会期：2017年7月8日（土）～8月27日（日）
主催：立命館大学国際平和ミュージアム

今年で開館 25周年をむかえた立命館大学国際平和ミュージアムは、1992年、立命館大学の教学理念である平和と民主主義を発展させるため、世界で最初の大学立の平和博物館として設立されました。

ミュージアムは平和創造において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、その主体者をはぐくむという理念のもと、展示や講演会など多岐にわたる活動を行ってきました。

本展はこれまで 80回以上開催した特別展のポスターの中から 46点を「子ども・学徒」、「核・放射能」、「写真」、「絵画・アート」、「文学・漫画」、「ノンセクション」の categories に分けて紹介し、ミュージアム 25年間の軌跡を振り返りました。

戦争や平和に関するテーマ、人類が直面する普遍的な課題など、ミュージアムが展示を通して伝えてきたことを改めて感じていただける内容となりました。

会場からは、「1つ1つのポスターを見るごとに、その時代を見ているようでよかった」、「こんなにたくさんの企画を行ってきたことを知らなかったのが驚いた」といった感想が寄せられました。

なお、本展は 2017年度博物館実習の実習生 4名が設営およびポスター選定を担当しました。

本展は 11月 6日（月）～12月 22日（金）に本学大阪いばらきキャンパス B 棟 2階 OIC ライブラリー展示室にて巡回展を開催します。こちらも是非ご覧ください。



第110回

「京都の伝統産業と戦争 — 陶磁器の活用をめぐる —」

会期：2017年9月12日（火）～10月4日（水）
主催：美術・工芸研究会（2017年度立命館大学大学院研究会活動支援制度助成対象）
共催：立命館大学国際平和ミュージアム

本展は本学大学院生で構成された美術・工芸研究会の成果発表として開催しました。本研究会は 2014年に本学大学院課の助成を受け設立し、京都五条坂にある京焼の窯元調査などの活動を行っています。

本展では、アジア太平洋戦争中、京都の伝統産業と戦争がどのように関わっていたのか、代表的な工芸品である京焼を事例に第 1 章「戦中五条坂の様子」、第 2 章「陶器製兵器」、第 3 章「大久野島と京都」の構成で紹介しました。

第 1 章と第 2 章では、2004年に本学文学部木立雅朗教授を中心に調査を行った藤平陶芸（京焼の窯元）製造の陶器製手榴弾とロケット戦闘機「秋水」の燃料精製装置（通称マル口）について取り上げました。

陶器製手榴弾は 1944～45年頃に全国の窯元で製造された兵器です。沖縄本島や硫黄島では火薬の入った状態での出土が確認されていますが、実際の戦闘にどれだけ配備されたかは明らかになっていません。

藤平陶芸の陶器製手榴弾は「大阪城の師団」に一度だけ納品されましたが、敗戦後残っていたものはすぐに窯元の敷地内に埋め隠されていました。

第 3 章では、戦時中に毒ガス兵器を製造していた広島県竹原市大久野島の歴史と、毒ガス精製の冷却過程で使われた「蛇管」が京都で理化学磁器を焼成していた高山耕山製であったことに着目しました。

展示を通して京焼と兵器産業との関わりを実物資料や写真で示すとともに、職人を徴兵で取られ、原料や燃料の供給不足により生産を維持することが難しくなった窯元が、やむなく戦争に巻き込まれていった背景について考える良い機会となりました。



藤平陶芸で見つかった陶器製手榴弾と納品時に使用したといわれる木箱

ミュージアム学生スタッフ ホームカミングイベント

日時：2017年10月14日（土）15：30～17：30

場所：立命館大学国際平和ミュージアム 2F 会議室

ミュージアムは今年で開館25周年を迎えましたが、2004年度に「ミュージアム学生スタッフ制度」が創設され、本学の学生たちがスタッフとして長年ミュージアム運営を支えてきました。学生スタッフは、来館者へのナビゲーションやメディア資料室での資料整理・アーカイブ作成など、「平和構築」に向けた教育普及・資料調査活動に大きく貢献してきました。学生自身にとってミュージアムそのものが学びと成長の場であり、その経験がその後の人生にどのように活かされているのか、元学生スタッフと現役学生スタッフが懇談・交流を行うためにホームカミング企画が10月14日（土）に開催されました。



当日は9名の元学生スタッフを囲んで、現役学生（14名）、職員、カセム館長や安齋名誉館長も交えて、30名余りがグループに分かれて自己紹介や意見交換などを行い、実り豊かな懇談会となりました。現役の学生スタッフにとっては、先輩からの力強いアドバイスや意見を伺うことによって、スタッフとしての存在意義を再認識し、社会に出て大学時代の知識や経験をどのように活かしていけるのかを考える良い機会となりました。以下参加者から寄せられた感想です。

（元学生スタッフより）

「職員のみなさまをはじめ、元学生スタッフ、現役学生スタッフの方々と情報交換ができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。私も昨年の4月から学芸員として仕事をしておりますが、知識等、まだまだ未熟なため、休日などは他館を訪れ、勉強の日々を送っています。お世話になった貴館にも今後足を運んで、企画展等を拝見できたらと思っています。」

「大学を卒業してから立命で学び、そして学生スタッフを経験してよかったと改めて感じる事が多くありました。学生時代はたくさんご迷惑をおかけし、そのたびにミュージアムの皆さまにご指導いただきありがとうございました。」

「今日は、皆様と交流できて本当に良かったです。帰るところがあるというのはすばらしいことです。」

（元学生スタッフより）

「職員のみなさまをはじめ、元学生スタッフ、現役学生スタッフの方々と情報交換ができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。私も昨年の4月から学芸員として仕事をしておりますが、知識等、まだまだ未熟なため、休日などは他館を訪れ、勉強の日々を送っています。お世話になった貴館にも今後足を運んで、企画展等を拝見できたらと思っています。」

「大学を卒業してから立命で学び、そして学生スタッフを経験してよかったと改めて感じる事が多くありました。学生時代はたくさんご迷惑をおかけし、そのたびにミュージアムの皆さまにご指導いただきありがとうございました。」

「今日は、皆様と交流できて本当に良かったです。帰るところがあるというのはすばらしいことです。」

（元職員より） ※今回は現職の元ミュージアム職員の方にお声がけしました。

「久しぶりに元ミュージアムスタッフをはじめ、教職員の皆さまにお会いすることができ、大変懐かしく、嬉しい時間を過ごすことができました。また現役のミュージアムスタッフからもお話を伺うことができたことも貴重な機会となりました。ミュージアムが持つ広がりやつながり、教育効果を改めて実感する機会となりました。」

「卒業生との久しぶりの再会も嬉しかったですが、卒業生と現学生等の交流が有意義であったと、卒業生から声を頂きました。次は、30周年企画？などと卒業生らは話しておりました。」

「同じ目的をもった学生や卒業生があつまった、ある意味クラブやサークル以上に関与の高い会でした。とてもすばらしい集まりだったと思います。」



全体挨拶の後、グループに分かれて行われた懇談会の様子



Working for Kyoto Museum for World Peace

学生スタッフのしごと 03

私たち2階学生スタッフは個人の来館者はもちろん、団体で来られた小中高生をメインにガイドをしています。2階の展示は「戦争がなければ平和でしょうか」をテーマにパネルやサイコロを使って説明をしています。

学生スタッフは展示ガイドだけでなく、ボランティアガイドや立命館学生、学外の市民の方との交流も大切にしています。ボランティアガイドとの交流会ではガイドの方に地階の展示を案内してもらって勉強したり、学生や院生を対象にNGOワークショップを年に2回開催したりしています。

2017年6月には、「難民・国内避難民×イラク」をテーマにNGOワークショップを企画しました。講師にお招きしたのは、特定非営利活動法人日本国際ボランティアセンター(JVC)でイラク事業を担当する池田未樹氏です。当日は約30名の参加者と共に、レクチャーを通して現地の暮らしや食文化を身近に感じ、JVCが取り組む平和教育を体験するワークでイラク事業への理解を深めました。

企画メンバーとして力を入れたのは、より多くの人を巻き込みながらワークショップを作り上げていくことです。初めての試みとして開催した事前学習会では、学内の難民支援団体パス

テルのメンバーにも参加していただき、ワークショップテーマに関する基礎的な知識を勉強しました。また広報面では、デザインを得意とする立命館学生にチラシ作成を依頼してより多くの目に留まる工夫をしたほか、立命館大学新聞と立命館大学放送局にも宣伝にご協力いただきました。

2017年後期には私(卯滝)がコアメンバーとしてNGOワークショップを企画しています。多くの方にNGOワークショップに来ていただき、平和について考える機会を私たちが作り、平和創造のためのさまざまな取り組みを知っていただけたらと思っています。

(アルッガマゲ未美利・卯滝由季)



開催に向けてミーティングを行う企画メンバー

入館者状況 (2017年4月～2017年9月)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	25	25	26	26	26	19	—	—	—	—	—	—	147
入館者数	2,102	3,961	4,240	2,936	2,628	2,474	—	—	—	—	—	—	18,341
累計(開館当初からの入館者数)													1,044,268
特別展	4/15～7/9 春季特別展 「DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」												9,791
ミニ企画展示	4/1～5/28 第107回 熟覧II—メディア資料室の誘い—												—
	6/1～6/30 第108回 ミュージアム・この1年で「もうたくさんだ」												—
	7/8～8/27 第109回 ミュージアム25周年記念 特別展ポスターコレクション1992—2017												—
	9/12～10/4 第110回 京都の伝統産業と戦争—陶磁器の活用をめぐる—												—
講演会ほか	春季特別展「DAYS JAPAN フォトジャーナリズム写真展」関連企画												
	5/4	・映画上映会&広河隆一氏講演 映画「広河隆一 人間の戦場」 講師：広河隆一氏 (フォトジャーナリスト)											198
	6/29	・映画上映会「ザ・トゥルー・コスト」											72
	5/13	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第3回ワークショップ											
	6/14	前期NGOワークショップ 「難民・国内避難民×イラク～JVCと現地NGOインサーンのイラク中北部キルクーク市での取り組みについて～」 講師：池田未樹氏 (日本国際ボランティアセンター (JVC) イラク事業担当)											32
	6/23	メディア資料研究会 第5回「西脇家資料—家族史・女性史として」											11
	7/23	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？—今、わたしにできること— 安齋名誉館長のお話&平和クイズ かんきょう学習会 エコセンボランティアによる「うちごみ診断」 スタンプラリーでミュージアム見学！ うちごみ診断結果報告 まとめ「今、わたしにできること」											21
	7/25～	小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会 (6日間・7/25、7/26、7/27、8/23、8/24、8/25)											75
	8/1～8/6	平成29年茨木市非核平和展 平和を求めて広がる非核都市宣言 (協力) / 茨木市立中央図書館											オープン
	8/1～8/6	第37回平和のための京都の戦争展 主催：平和のための京都の戦争展実行委員会											2,660
		立命館土曜講座											
	8/5	「戦争と社会正義—昨今の軍事的緊張・難民・人権問題に法はどのように対応するのか？経済社会協力による平和達成への道のり」 講師：吾郷真一氏 (立命館大学法学部教授) / 末川記念会館											207
	8/26	「マンガと平和を展示する」 講師：吉村和真氏 (京都精華大学国際マンガ研究センター教授・副学長) 田中聡氏 (立命館大学文学部教授・国際平和ミュージアム副館長) / 末川記念会館											144
	8/8	科研費挑戦的萌芽研究「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」プロジェクト 第4回ワークショップ											
9/10	第51回原爆忌全国俳句大会 (後援)											70	

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集後記

最近ネットニュースで目にした、とあるアメリカの軍隊での出来事です。黒人差別の落書きが発見され、責任者はただちにすべての兵士、スタッフを一堂に集め、このように明言しました。「われわれは多様性 (Diversity) を尊重する。それが受け入れられない者はただちにこの場を去れ」。多様な人種、民族、宗教、文化を持つ人々が共に暮らし、民主主義や人権を尊重し、多様性を社会発展の原動力としてきたのがアメリカ合衆国という国ではないでしょうか。しかし、公民権運動など長年の歴史の中で克服してきたはずの人種差別が払拭しきれていないことは、最近の南部州での警察官の黒人への暴力事件として現われ、米国社会に緊張をもたらしました。軍隊という特殊な組織だからこそ、これに毅然とした態度を示すことが必要だったので。折りしも、当館で開催されていた世界報道写真展 2017年図録のトップを飾ったのは、「現代社会の問題の部」で1位となったジャナサン・バックマンの「黒人への警察官の暴力に対する抗議デモの女性」を写した象徴的な一枚でした (編集局)。

INFORMATION

ミニ企画展示

第 111 回

第 11 回立命館附属校平和教育実践展示

立命館宇治中学校・高等学校「憲法 70 年と立命館宇治の平和教育」

会期：2017 年 12 月 5 日（火）～12 月 16 日（土）

内容：例年の平和教育に加えて、憲法 70 周年の企画など、立命館の附属校ならではの取り組みを行いました。憲法 70 周年集会報告（高校）、東アジア歴史キャンプ（中高）、平和新聞（中 3）、北朝鮮ミサイル問題への高校生の応答（高 1）などポスター形式で展示します。

※立命館中学校・高等学校、立命館守山中学校・高等学校、立命館小学校、立命館慶祥中学校・高等学校の展示は終了しました。



昨年度の展示の様子（立命館宇治中学校・高等学校）

立命館附属校平和教育実践展示とは

立命館の初等・中等教育段階での「平和・人権・地球市民教育」の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生・中学生・高校生の平和・人権・環境などの課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を知ってもらおうとするものです。ミュージアムに来館する児童、生徒の皆さんや一般の方々が改めて平和について考える機会となればと考えています。



街中を行進するデモ隊 1981 年 8 月 28 日 撮影：遠藤真雄

第 112 回

原発設置をめぐる住民投票実現までの軌跡

会期：2018 年 1 月 13 日（土）～1 月 28 日（日）

主催：巻原発住民投票から 20 年 明日の巻地域を考える会（代表 中村正紀）

共催：立命館大学国際平和ミュージアム

内容：1960 年代に設置計画が発表され、2003 年に東北電力が正式に設置計画を撤回した巻原子力発電所（新潟市旧巻町）は、住民投票の結果を受け計画が白紙となった原発のひとつです。本展では巻原発設置をめぐる住民運動の軌跡を写真と年表で振り返ります。



KYOTO, JAPAN. 1947-08. BCOF TROOPS ON LEAVE DISCUSS ONE OF THE CITY'S CINEMA POSTERS. Australian War Museum
1947 年 8 月、京都にて、休暇中の英連邦軍の兵士たちが映画ポスターについて話している様子 オーストラリア戦争記念館蔵

第 113 回

第 23 回京都ミュージアムロード参加企画「占領期の京都」

会期：2018 年 2 月 10 日（土）～3 月 25 日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

内容：1945 年 8 月、敗戦により大日本帝国が崩壊し、戦時体制が解かれるとともに、戦争に関わる証拠隠滅や占領軍の受け入れの調整がはじまりました。同年 9 月には京都に米軍が進駐し、西日本を中心とした占領の拠点とされました。本展では、収蔵資料を中心に占領期の京都の様子を紹介いたします。

立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド募集説明会

当館の運営・趣旨を理解し、健康でガイド活動に意欲ある方を求めています。ガイド活動のあらましと登録までの流れなど説明いたしますので、ぜひご参加ください。

日時：2018 年 1 月 13 日（土）、21 日（日）13：30～

場所：国際平和ミュージアム 2 階会議室

募集人数：5 名程度

申込不要・参加無料

立命館大学国際平和ミュージアムだより

第 25 巻第 2 号（通巻 72 号）2017 年 12 月 1 日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

TEL：075-465-8151 / FAX：075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum>



日本平和博物館協議会